君想い☆ミ

若宮ひよこ?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君想い☆ミ

【Ｎコード】
Ｎ８９６１Ｌ

【作者名】
若宮ひよこ？

【あらすじ】
高校１年生の入学式に出会った相葉幸也と櫻田壮也は、「おっちょこちょい」と「しっかり者」の正反対。
しかし、２人の絆は、言葉で言い表すことのできない程に深いものとなっていく。
相葉のことをいつでも支え、時に叱ってくれる母親のような存在の櫻田に、相葉はいつしか好意を抱いてしまう。
相手は自分と同じ男であると分っていても、なかなか想いを変えることができず・・・！？

体育祭（前書き）

この作品は、今、人気のジャニーズ「嵐」の「櫻井翔」サンと「相葉雅紀」サンを主人公として使わせてもらっています。（読んだだけで何となく分ると思いますがｗ）
いやぁ・・・何となく、２人のキャラが生かせそうな気がしたので・・・（＾―＾）
嵐好きの人も、そうでない人も、楽しんでくれたらいいと思います。
ちなみに、話の中に出てくる「君想い」という歌詞ですが、（タイトルにもなってますよね？）こちらはＧＲｅｅｅＮの曲がピッタリな感じだったので使わせてもらいました。（どんだけパクリマンなんだよ！！とは・・・思わないで下さいネｗ）
短い前書きですみません。興味を持って読んでくれたら嬉しいデス！（＾∀＾）

体育祭

君と出会ってから月日は流れ　　こんなそばで支え合って
君のくれたもの多くあって　僕の両手思い出増えて
楽しいことばかりではないが　君が居てくれるから乗り越えてこれた
本当君にありがとう　これからもあげたいよ何かを・・・

「えぇぇぇ!?まぢで相葉に決まっちゃったわけ??」
「あぁ〜!!!俺らの体育祭は終わったぁぁぁぁ!!!」
くじ引きで引いた結果、今年の体育祭の団長が相葉幸也に決まってしまったのだ。
「えっと・・・僕、先生に言って変えてもらうよ。」
「おぉ。ぜひともそうしてくれや。」
相葉が教務室へ向かおうとしたその時・・・
「待てよ!やってみないと分かんないだろ!!」
そう、口にしたのは相葉の親友桜田壮也だ。
「同じだよ。僕が今まで成功したことなんてある??」
「ちょっと来い。」
櫻田は、そう言うと、相葉の手を引いて歩いて行った。
2人の姿が見えなくなると、クラスの誰かが呟いた。
「ホント。考えられない。何で相葉と櫻田さんが親友なんだ・・・??」

2人が出会ったのは高校の入学式のことだった。
体育館の前で、相葉が高校入学の案内書を眺めながら突っ立っているのを見て、櫻田が「どうした??」と訪ねた。
「体育館だよね?集まるとこ。」

「え？教室だぞ。」
「だってこれに書いてあるから・・・。」
「？？ちょっとそれ見せて。」
相葉は言われるがままに櫻田に高校の案内書を手渡した。
「・・・これ、去年のやつだぞ？？」
「うっそぉ！？」
「うん。だって、今年はまだ、入学式の説明受けてないだろ？」
「うん・・・。」
「ほら、毎年、説明受けてから体育館で行うだろ？だから、今年はまだ受けてないから教室へ行くのが先だ。」
「・・・知らなかった。」
相葉はキョトンとした顔で答えた。
そんな相葉を、櫻田が心配になったのか、相葉の手を引いて教室まで連れて行った。
それが2人の出会いの始まりだ。
相葉から見る櫻田への第一印象は「しっかり者」
櫻田から見る相葉への第一印象は「おっちょこちょい」
2人は全く正反対だったが、何気に運命を感じていたのだ。
「これから長い付き合いになりそうだな。」と・・・。

生徒会会議室に、テーブルを挟んで、対立した形になり、座る2人。
「よし、早速計画に取り組むぞ。」
「何からやればいいのか分んないや。」
「そんなことを言うだろうと思って・・・。」
櫻田は、1枚の紙と鉛筆を相葉に差し出した。
「計画用紙だ。まず、そこの1番に、チームをどういう風にまとめたいのか書いてみろ。」
（櫻田くん・・・いつもこんなの自分で作ってたの？？w）
「書いたよ！！」

「僕は、まとまりのあるチームを作り上げたいです。か・・・なかなかいいと思うぞ。じゃあ、どうしたらまとまりのあるチームを作れると思う??」
「う～ん・・・。クラスの壁をなくす！みんなが仲良くする！！」
「それは、今の状況を見ると、できそうなことか??」
「う～ん・・・。ちょっと難しいね＾＾；」
「じゃあ、どうしたら仲良くなれると思う??」
「みんなが仲良くできるような交流の機会をいっぱい作る・・・とか??」
「おぉ。いいじゃん！じゃあ、今までのを全部まとめて書くんだ。そして、それがまず最初の挨拶になるわけだ。」
「うん。分ったよ！頑張る！」
「おぅ！」

それから数日後、早速団長発表と紹介をすることになった。
「えっと・・・今年の体育祭の紅軍団長になった・・・」
緊張で震えて、なかなか前を向くことができない。
櫻田は、相葉に合図をだした。
自分のポケットを指差して、「た・し・か・め・て」と口を動かした。
相葉は、ポケットの中に手を突っ込むと、紙切れが入っていることに気付いた。
「いつもの元気さでいけよ?」
そう、紙に書いてあるのをみて、相葉は何だか勇気を得た。
「今年の体育祭の紅軍団長になった相葉幸也です！！！」
みんなは、それまで、聞く気ゼロで手いたずらをしたり、友達としゃべっていたりしたが、その堂々とした声に思わず顔を上げて耳を傾けた。
「まず、僕はまとまりのあるチームワークを作り上げたいと考えて

います。そのためには、クラスの中にある壁をなくし、みんなが仲良くする必要があると思います。」
みんなは、その言葉につまづいたのか、俯いてしまった。
「みんなが仲良くするには、みんなが互いを理解し合うことが大事です。だから僕は、交流の機会を考えていきたいと思います。できていないことから改善するように、努力しますのでどうぞみなさんよろしくお願いします！！！」
そう言って、相葉はペコリとお辞儀をした。
その場に、歓声の声と拍手が巻き起こった。
いい気分になって、にやける顔を堪えながら階段を下りると、また一つ段差があることに気付かなかったのか、その場に思いっきり転んでしまった。
「ハハハハハハハｗｗ」
今度は腹を抱えて笑うみんなの声が聞こえた。
相葉はひどく赤面した。

そして、週に1度のペースで交流の会が行われ、みんなはそれを毎日楽しみにしていた。
クラスの仲もどんどん深まっていき、とうとう、体育祭当日の日がやってきた。
快晴の中、相葉の心の中は曇り空・・・。
緊張と不安でいっぱいだった。
櫻田は、相葉の耳元で囁いた。
「今までたくさん努力したんだ。自信持て。相葉の持ち前の明るさを堂々と発揮すればいい。」
「保護者の皆さま、地域の皆さま、今日は忙しい中見に来て下さって大変ありがとうございます。僕が、今年の体育祭の紅軍団長になった相葉幸也です。」
お客さんたちは口々に言った。

「しっかりした子だねぇ。」
「この体育祭のために僕たちは、一か月前から精いっぱいの努力をしてきました。その成果を、等々発揮する日がやって来ました。地域のみなさん。どうぞ応援お願いします。」
拍手が響き、相葉は土台から下りた。
行進の音楽と共に、紅軍、白軍それぞれが自分の軍の場所に移動する。
そして、アナウンスガ流れる。
「第１種目は玉入れです。今年は地域のみなさんにも参加してもらいましょう。」
笛がなり、競技がスタートすると、誰もが本気の顔で玉入れの籠のもとへ走ってくる。
相葉は、クラスの中でもけっこう背が高い方だったので、何とかたくさんの玉を入れることができた。
笛がなり、競技が終了する。
「結果。紅軍の勝ち！」
紅軍は、白軍を上から目線で見下ろす。「どうだ？思い知ったか？紅軍のチームワークを」と付け加えて。
出だしから紅軍に特典が入り、なかなかいいスタートだ。
それから、第３回まで玉入れの競技をしたが、３回とも紅軍の勝利。第２種目の綱引きでも紅軍が２対１で勝利し、第４種目までは連続で紅軍の勝利が続いた。
しかし・・・。
「第５種目はリレーです。みなさんバトンを上手く続けて頑張りましょう。」
また、笛が鳴り、みんなが本気モードに入る。
「よ～い・・・・ドンッ！！」
聞き覚えのある音楽と共に、観客たちの声も盛り上がる。
紅軍は、運動能力に恵まれた者が多く集まったクラスで、１番から１３番まで、順調にリードしている。

１４番・・・２０番・・・２５番と圧倒的に白軍を追い抜きバトンをつなげていく・・・。
２８番・・・櫻田の手からバトンが渡され相葉に・・・のハズが、何故か相葉は紅軍のチームからバトンをもらった。
「えぇぇぇ！？」
クラスメイトも、観客たちも驚いている。
ピピーッ！！！
笛が鳴り、アナウンスが流れる。
「順序がおかしくなってしまったようなので、第２回戦目をやりたいと思います。」
「まぢかよ～～・・・！！」
もう、紅軍のみんなはあきれかえっている。
かなり必死に走ったため、みんな息が切れてもう、走れる様子はない。
「あ～あ・・・リレーが１番点数高い競技なのに・・・。」
「もう無理だよ。あきらめようぜ・・・。」
紅軍の気力がどんどん低下していく・・・。
第６種目、７種目と連続で紅軍が負け、とうとう、同点になってしまった。
残るは、最後の種目「パフォーマンス」。
この場合、白軍が勝つことがあきらかだ。
白軍は、バク転などを披露する、ヒップポップダンスをやると聞いていた。
それに比べて紅軍は「君想い」という歌をみんなで手をつなぎ、輪になりながら歌うという、ダンス無のパフォーマンスだ。
競技の練習に時間をかけ過ぎたため、パフォーマンスの練習を全くしていなかったのだ。
紅軍は、もちろんのように投げやりになっていた。
「あ～めんどくせっ！！！もう、負けたんだから意味ねーって！！！」

「つったく・・・誰かさんのせいで。」
相葉は俯き、ぐっと涙を堪えた。
「まだ終わってねぇじゃん！！！」
櫻田は怒っていた。
「お前ら、一体どうしたんだよ??俺らが作り上げてきた絆ってのはこれっぽっちのものなのか??俺は、嬉しかったよ。みんなが競技に燃えてる姿見て、クラスが一つになれたって・・・。」
みんなはただ黙って俯いている。
観客たちも、不思議そうにその光景を見つめている。
「まだ終わってないのに勝手に決めつけんなよ！！！まだ可能性があるだろ??それを信じようと思わないわけ??」
珍しく怒った櫻田を見て、クラスメイトたちが揃って言う。
「俺達・・・最後まであきらめない！！！」
「よし。少し心の準備整えておけ。」
そう言うと、櫻田は前に出て土台の上に立った。
「少し、この場を借りて、パフォーマンスについて話したいと思います。」
観客、紅軍、白軍、先生、みんなが櫻田に目を向ける。
「僕たちは、競技の練習のことしか考えてなくて、パフォーマンスの練習が全くできませんでした。
紅軍のダンスは確かに上手です。でも、僕らは自分たちのチームを誇らしく思っています。
絆があるんです。だから、ぶっつけアドリブですが、逆にそれを生かし、地域のみなさんに見せたいと思います。どうぞ応援お願いします！！！」
そう言って、櫻田は土台から下り、紅軍のみんなにピースサインで合図した。
紅軍は音楽の伴奏が流れると共に、呼び合って手をつなぎ、円を作った。
そして、一人一人が一小説ずつ歌いあげつなげていく。

曲の盛り上がる部分になると、みんなが声を揃って歌った。
決して歌が上手いとは言えなかったが、それはそれは聞いていて、心地の良いものだった・・・。
メロディとメロディが重なり合い、まさにみんなが、今、一つになった瞬間だった。
そして、最高の笑顔で紅軍のパフォーマンスは終了した。
白軍は、「何だあれ。だっせー」と鼻で笑いながら自分たちのパフォーマンスを披露した。
思いっきり大きく強くバク転を繰り返す・・・。
なめらかでリズムのいい口調で、歌うのが難しい、早くて英語言葉の歌をカッコ良く歌いあげる・・・。
そのプロのようなダンスと歌に、観客たちも、先生も唖然としている。
締めも、カッコ良く、馬跳びの連鎖で終わった。
そこに、盛大な拍手が巻き起こる・・・。
紅軍は、「負けた」と思い、ガッカリした。
閉会式の音楽が流れる・・・。
白軍は自信に満ちた堂々とした姿で、紅軍はトボトボとした歩きで前へと進む。
「結果発表・・・。優勝・・・紅軍!!!」
「え・・・!?」
紅軍のみんなは大きく口を開けてびっくりしている。
校長が、咳払いをした後に言った。
「確かに、白軍のパフォーマンスはお見事でした。あんな素晴らしいパフォーマンスを見たのは初めてです・・・。しかし、例えアドリブでも、自信を持って披露したあの、紅軍のパフォーマンスに絆を感じ、今までにない感動がありました。そんな紅軍のみなさんだからこそ、この優勝を手にできたのですよ。」
「うっ・・・うわぁぁぁぁ!!!!!!」
紅軍のみんなが泣きだした。

櫻田がみんなをなだめる。
「ちょっと・・・！泣くなって！！^^」
「うわぁぁぁぁ！！！！紅軍サイコー！！！！！！」
「・・・？？」
櫻田は服が濡れたような変な違和感がした。
「ちょっ・・・！！相葉まで！！泣くなって！！しかも俺の服に鼻水ついてるしぃぃぃ！！！」

この日の写真に写ったみんなの涙は、太陽にも負けない、素晴らしい感動の涙だった・・・。

恋する気持ち

第二章☆ミ恋する気持ち

「相葉！おはよう！」
いつものように爽やかで、何気なく笑顔でほほ笑む櫻田の挨拶。
「おっはよ～！！」
・・・！？今、何か変な違和感が・・・。
ま、いっか。

体育際のこともあってか、教室に行くと、みんなの相葉に対する態度が違う。
「おはよ！」
「よっ！」
「はよ～」
・・・！！一気に5、6人の挨拶。これは、普段なら考えられないことだ。
「この前の体育際はホント立派だったよ！」
「うん。相葉にしてはよくやってくれたな。センキュ！」
「でもさ～、最終的にはやっぱ櫻田さんのお陰じゃん。」
「確かに・・・。」
まずい・・・また怒られる！？
「今から、櫻田さんに礼言ってこいよ。」
クラスの男子2人が相葉の背中を押しては1階にいる櫻田のもとへ連れていく。
・・・！！
「おぅ。相葉。どうした？？」
偶然、生徒会会議を終えたばかりの櫻田に出会った。

「えっと・・・」
何でだろう・・・。何かまともに顔見れないよ!!
「な・・・何でもないよw」
「そうか。じゃあ俺、先生に呼ばれてたから・・・行くな。」
(おい!!言えよ!!追いかけろ〜!!)
男子2人は、顔と身振りだけで相葉に伝える。
相葉は急ぎ足で櫻田の後を追う。
「さっ・・・櫻田くん!!」
「おぅ。何だ??」
「あ・・・あのさ・・・。」
男子2人は同じことを心の中で思った。
(おいおい。何でそこで緊張してるわけ??)
「体育祭のこと・・・ありがとう。」
「??わざわざ礼言うために??」
「うん・・・。」
「そうか。やっぱ相葉は優しいな。」
(いやいや、優しいのは櫻田くん(さん)の方だって!!)
「んじゃ、俺は先生のところに・・・。また後でな。」
そう言って、櫻田は手を振りながら2階へ上がって行った。
(・・・・・。)
「おい、何ボーっとしてんだ??」
その声で、相葉はふと、我に返った。
「オマエ・・・何??もしかして・・・」
ゴクリ。思わず唾を飲み込んだ。
(やばい・・・朝方、間違えて女子更衣室入ったのバレタ!?)
「ホモ・・・??」
「えっ・・・??」
「櫻田さんのこと、好きなんだろ??」
「櫻田くんはただの・・・友・・」
「ちょっ!!赤くなってるぜ??まぢかよ!!」

「いや、あのさ、確かに分るよ?俺だって女だったら恋してるし!絶対。だけどさ、オマエは男なんだぜ??」
(え・・・??これって・・・恋なの??これが恋する気持ち・・・??)
相葉はここでようやく、これが恋だということに気付いた。
しかも櫻田が初恋のお相手!!w

教室へ行くと、早速櫻田がいた。
次の授業は科学(理科)。
(・・・!!やばい!科学の宿題忘れた!!)
相葉は、ばれないように櫻田をチラリと見る。
櫻田は、もちろん宿題をやってきたのであろう。余裕に満ちた顔をしていた。
相葉は今度は時計を見る。
あと休憩時間が5分はある。
5分なら、何とか写すのに間に合いそうな時間だ。
(・・・でも無理だよ!!さっき、恥ずかしいことに気づいちゃったし!!)
「そういえばさ、科学、宿題忘れてきた奴、次にもっと増やすんだろ??」
誰かの話声が聞こえた。
(やっぱ頼みにいこう。)
その話を聞いた途端、即決定。w
「櫻田くん。」
「おぅ。どうした??」
「その・・・宿題・・・。」
「あぁ。またやってこなかったのかw」
櫻田は苦笑いしながら相葉にプリントを渡した。
カキカキカキ・・・。

周りは人々の話声でうるさいハズなのに、何故か2人だけの空間になったようで静かに感じる。
相葉は櫻田の近くにいるのが耐えられなくて、大急ぎで書いた。
「そんなに急がなくても、あと3分はあるし間に合うよ。」
櫻田はクスッと笑った。
カキカキカキカキカキカキカキカキカキカキ・・・・。
さらに鉛筆の動きが早くなってしまう。
「あ、ありがとう！！」
相葉はプリントを櫻田に返すと、急ぎ足で自分の席に戻った。
（もう、2度と宿題を忘れないようにしよう。）
相葉は心の中でそう思った。

帰り道、相葉の目の前に、一台の黒い高級車が止まった。
「相葉。乗ってくか??」
車窓から顔を出したのは櫻田だった。
櫻田は普通にお金持ちならしい。
「いや、いいよ。」
「いいって。どうせ同じ方向だろ??」
「母さんが、知らない人の車には乗るなって・・・。」
「知らない人!?俺??」
「あ、ううん・・・。」
「カバン重いだろ??乗れって。」
櫻田は車のドアを開けた。
「じゃあ、お願いします・・・。」
相葉は車に乗った。
車が走り出す。さすが高級車。座り心地も広さも最高。
・・・。沈黙が流れる。
相葉が話を切り出す。
「櫻田くん・・・今日はいろいろとごめんね。」
「あぁ。気にすんな。いつものことだろ??」

「た・・・確かにw」
「・・・??」
櫻田が首を傾げた。
「相葉。どうした??顔赤いぞ??」
(えぇぇ!?また!?)
「もしかして、熱でもあるんじゃないのか??」
「いやいや、大丈夫だから!!ホントに!!」
「いや、以上だぞ。その顔色は。」
(え・・・そんなに赤いの!?)
櫻田は、相葉のおでこに手を当てた。
「あれ??何ともないな。」
「相葉様。着きましたよ。」
櫻田の祖父が口を開いた。
「あ、じゃあ・・・ありがとう。また明日ね!」
そう言うと、相葉は急いで車から降りて家へと走って行った。
「・・・??」
・・・櫻田は、不思議そうに相葉の後ろ姿を眺めていた・・・。

研修

第三章☆ミ研修

「もうすぐ研修かぁ～。月日が流れんのも早いもんだな。」
クラスメイトの誰かが呟いた。
そうなのです！やっと体育祭という大きな行事が終わったと一息着いたところで、また、新たな行事。そう、研修がやってきたのです！
「相葉、もう、研修の準備始めてるか？？」
うわぁっ！！櫻田くん！！そっか・・・櫻田くんと班一緒なんだった！！
「ううん。まだ・・・。」
「俺はもう、始めてるぞ。相葉もそろっと必要な物とか準備しといた方いいぞ。」
「うん。分った・・・。」

2週間後・・・。
相葉は布団の中でうずくまっていた。
母が相葉を無理やり起こす。
（やだよ～・・・。櫻田くんと同じ班なんて！！いや、櫻田くんが嫌いってわけじゃないんだけど、緊張してまともに行動できないよ！）
急いで家を出て集合場所に向かう。
ハァ・・・ハァ・・・。
「相葉！おっせ―ぞ！！みんな待ってたんだよ！！」
「ごっ・・・ごめん！！」
大きな荷物を抱えながら新幹線に乗り込む。
（あれ？？僕の席って何処だっけ？？）

戸惑っていると、櫻田が声をかけた。
「相葉、俺の隣じゃん。」
（えぇっ・・・！？うっそぉ？？）
「櫻田くん。荷物やたらと大きいね。」
「あぁ。いろいろ詰め込みすぎちゃって。」
櫻田くん、以外にマンガ本とか持ってきてるのかなぁ・・・。
櫻田は、目をキラキラと輝かせながら語りだす。
「実は秘密で持って来たんだ。インフルエンザ予防のマスク、あとは石鹸、アイマスク、救急セット、非常用袋、ロープ、マッチ・・・。」
「ロープ？？マッチ？？何に使うの？？」
「火事が起きた時に窓から下りるためにロープを、南極の山で遭難した時のためにマッチを。」
「いやいや、南極なんて行かないから必要ないよ！＾＾」
「いや、相葉ならきっと南極人に連れ去られることもありえる。」
「確かに・・・。」（ビミョ～に傷つくよ！それ。w）
「・・・・・。」
2人とも無言になる。
微かに体が揺れ動き、相葉の肩が櫻田の肩に触れる。
（う・・・うわぁっ！！！）
「相葉、酔ったのか？？」
「え？？ううん。」
「そうか？？でも、顔、真っ赤だぞ？？」
（ま・・・また！？）
「酔い止め持ってきたんだ。飲めよ。」
「いいよ。本当大丈夫だから。」
「いや、大丈夫じゃないだろ！飲んだ方がいいって。」
「う・・・うん。」
（酔ってないのに飲むって・・・逆によくないよ！しかもマズイ・・・。）

夕方６時半、ようやく研修施設に到着。
長い長い夜が始まりそうだ・・・。
着いて荷物を部屋まで運び、すぐに夕食に入った。
「いただきま～す！」
「うわぁ・・・この天ぷら、めっちゃ上手いわぁ・・・。」
男子高なのでみんな悔い盛りですから、あまり残す人はいないはずなんですが・・・。
相葉は好き嫌いが多いようで、全く皿の中が減っていない。
「相葉、なんか調子悪いのか??」
「ううん。嫌いなのが多くて・・・。」
「じゃあ、俺が食べるよ。残すのはもったいないし。」
そう、言って、櫻田は相葉の皿に残った食べ物を食べていった。

それから7時。今度はクラス別に風呂に入る。
「あ～いい湯。疲れが取れるな～。」
クラスの一人に、相葉は声をかけた。
「ねぇ、櫻田くん見てない??」
「あぁ。別の時間に一人で入るらしいぜ。」
「何で??」
「さぁ・・・。」
もう一人、話に加わってきた。
「そういえばさ、櫻田さんってプールの授業になると休むよな。」
「・・・。」
相葉は少々、考え込んでしまった。

９時。消灯。

「ハイ。寝る時間です！！消しますよ～。」
カチッ。
そう言って、先生が部屋の電気を消した。
カチッ。
先生がいなくなったのを確認すると、一人の生徒が電気をつけた。
そして、次々に人が隣の部屋に移動して行った。
この部屋に残ったのは、相葉と櫻田の2人だけ。
「みんな・・・行っちゃったら静かになったね。＾＾；」
すー・・・すー・・・。
（？？櫻田くん・・・寝てるの？？）
すー・・・すー・・・。
（緊張するよ＞＜櫻田くんと2人で寝るのって初めて！！）
すー・・・す・・・。
（・・・。寝れない・・・。）

結局、相葉は２４時間眠れなかった。
フラ・・・フラ・・・。
体が左へ右へ、フラフラしてしまう。
（あぁ・・・オマケに頭まで痛い・・・。今日は最悪の体調だ。）
先生がバスの中でみんなに向かって話し始めた。
「貸切のバスなので席は自由です。でも、立ったり移動したりしないこと。」
「おい。優斗。一緒に座ろうぜ～！！」
「智也～！！隣にしよ！！」
・・・次々に、仲いい同士が座って行く・・・。
相葉は櫻田をチラッと見た。
（無理無理無理！！）
相葉はいつも相葉をからかっている男子2人に声をかけた。
「ねぇねぇ。あこの3人用の席に一緒に座ろうよ。」

「嫌だよ。何でオマエなんかと・・・。」
「そーだよ！櫻田さんと座ればいいじゃん。」
「だって・・・。」
男子２人は顔を見合わせた。
「・・・なるほどね。」
「しょうがないな～。」
「ありがとう！！」
こうして、相葉とその他２名で３人用の席に着いた。
それを見て、櫻田は首を傾げたが、まぁ、いいか。と一人で２人用の席に座った。

それから２０分後、ようやくバスが目的地に到着した。
先生が呼びかける。
「ハイ。では前の席から順に下りて行って下さい。」
前から順に、みんな弾んだ気持ちで下りていく。
そして、相葉が席から立った時だ。
フラッ・・・！！
（何？？立ちくらみ？？）
足が何故か重く感じた。
あまり気にせずに歩いていると、途中でこけそうになった。
「大丈夫か・・・？？」
「わわわわ・・・さっ櫻田くん！？」
見ると、相葉の体はしっかり櫻田にキャッチされていた。
「あ・・・うん。だっ・・・大丈夫！ありがとう！！」
相葉は急いで櫻田の本から去って行こうとしたその時・・・。
「相葉・・・無理して俺と一緒にいなくてもいいんだぞ？？」
櫻田が悲しそうにポツリと呟いた。
「え・・・？？」
「俺がみんなに嫌われてるから、可愛そうだと思って今まで一緒に

いたんだろ??」
「何言ってんの??みんな櫻田くんにあこがれてるんだよ。」
「でも、みんな俺のことだけさん付けで呼ぶし・・・あきらかに態度が違うし・・・。」
「それは、櫻田くんに対する尊敬の眼差しの表れだよ!!」
「そうなのか・・・??でも、相葉、さっきのバスの席のこととか・・・。最近、俺といると熱出したりするし・・・。」
「それは・・・違うよ!!」
「本当に??」
「うん。実は・・・。」
自然に手に力が入る。
櫻田はじっと相葉の顔を見つめ、その先の言葉を待っている。
「じっじっ実は・・・さっ櫻田くんといると・・・何か・・・恥ずかしくて・・・。」
「・・・!?何を今さら。ずっとそんな気持ちで俺と一緒にいたのか??」
「いや・・・最近。」
「だよな。俺も最近、相葉の様子がおかしいなと思ってたんだ。」
「ぼっ・・・僕は・・・さっさっ櫻田くんのことが・・・。」
「相葉、どもりすぎだ。^^;」
胸の鼓動が高なっていく・・・。
「すっ・・・好きです!!大好きです!!」
(い・・・嫌だぁぁぁぁ!!!終わったぁぁぁぁ!!もう、明日から櫻田くんに顔合わせられない・・・泣)
櫻田はゆっくりと口を開いた。
「何だ・・・。そんなことか・・・。」
「え??」
「俺だって好きだぞ??」
「櫻田くん・・・?」
こうして、2箔3日の研修は幕を閉じた。

恋の作戦？

第四章☆ミ恋の作戦？

「櫻田くん！！おっはよ～～！！」
「おぅ。おはよう。」
（よかった・・・相葉の調子が戻ったみたいで。）
櫻田↓！？
相葉は、櫻田の手を微妙に握った。
櫻田は、特に気にしないフリをしてそのまま歩いた。

教室に行くと、相葉と櫻田が手をつないでいるのを見て、一気にみんなの視線が集中した。
「え・・・まぢで・・・！？」
（？？）相葉と櫻田は首を傾げる。
「まぢでできちゃったのかよ！？」
「うん・・・。」
相葉は少し顔を赤らめる。
櫻田は全く意味を理解していないようだった・・・。

「なぁ。櫻田さんとのラブチャンス作戦考えたんだけど。」
「え？？何？何？」
「まず、俺ら2人で櫻田さんを目隠しして屋上まで連れていく。」
「うん・・・。」
「で、櫻田さんの目隠しを取ると、高所恐怖症の櫻田さんは焦りだす。」
「え？？櫻田くんって高所恐怖症なの！？」

「そーだよ！オマエ、あんだけ一緒にいて、そんなことも知らなかったの！？」
「以外だぁ・・・。初知りだよw」
「んまぁ、話戻るけど、櫻田さんは逃げ出そうとするけど、出口が塞いである。そこで相葉が登場だ！！」
「僕？？」
「おぅ。オマエが櫻田さんを助ける！櫻田さんはオマエに感謝しもっとオマエを好きになるだろう。」
「うん。やってみるよ！！」
「んじゃ、放課後に早速作戦開始な！！」
「ＯＫ～！！」

そして放課後・・・。
「櫻田さん♪」
例の２人が櫻田に声をかけた。
１人が櫻田を押さえつけ、もう１人が櫻田に目隠しをした。
「・・・！？」
「これから櫻田さんを素晴らしいところにご招待しま～す♪」
「あぁ。サプライズって奴だな。」
「そそ。そーです＾＾」
思わず２人の顔がにやける。
相葉はその光景を陰で見つめている。
２人は櫻田の手を引いて、長い廊下を歩き、さらに長い階段を上った。
「一体何処まで行くんだ？？随分歩いてるじゃないか。」
「ハイ。ストーップ！！ここが終点で～す！！」
２人は、櫻田の目隠しを外すと、出口を塞いですぐさにその場を後にした。
「・・・・！！！！！」

櫻田は大きく目を見開く。
「い・・・い・・・嫌だァァァァァァァ！！！」
櫻田の大きな悲鳴が空高く響いた。
出口は硬い扉によって塞がれている。
櫻田は焦り、頭を抱え屋上をぐるぐると回った。
制服は汗でびっしょりだ。
そして・・・相葉が登場！！
ガチャッ。
相葉が外側から鍵を開けた。
「櫻田くん。安心して！！」
「無理無理無理・・・。俺、自分が誰だか分かんなくなってきた・・・。」
「大丈夫だよ。もう出られるから。」
それを見ていた２名は必死に笑いを堪えた。
「相葉の演技上手っ！！まぢおもれーｗｗ」
相葉は櫻田の手を引いて、屋上から救出した。
３人は、手を合わせた。
「イエーィ☆作戦成功！！」
「・・・！？」
プリントをビリビリに破いている櫻田。
「ちょっ。櫻田くん！？何やってんの！？」
「こんなのやりたくない。」
「明日の宿題じゃないですか！！」
櫻田は、テスト用紙までビリビリに破いた。
「せっかくの１００点を捨てないでよ！！」
「１００点は０が２つもついてる。＝マイナス１だ。」
「ちょっ。何わけの分らんこと言ってんですか！！」
櫻田はカバンをその場に放り投げ、猛スピードで何処かに走って行った。
３人は声を揃えて言った。

「成功・・・じゃない（よな）。」
しばらくして、また櫻田が顔を出した。
「忘れ物した。」
櫻田はカバンを拾った。
「自分で投げたんじゃん！！」
「うわっ。珍し～w相葉が櫻田さんに突っ込むなんて！！」
「笑ってる場合じゃないって！！」
櫻田は、自分の目の前を通り過ぎた上級生に声をかけた。
「オマエ、空気が入りすぎてるぞ。俺が抜いてあげよう。」
「櫻田くん！！その人は風船じゃないから！！ただのデブだよ！！」
「あぁ??何だとぉ??」
何と、櫻田が声をかけた相手は、３年生で最も有名な不良生徒だった。
「失礼した。オマエは人間のために食べられる運命のブタだな。」
「オメェ・・・生徒会員の櫻田壮也だろ??」
「・・・何だそれ??ブタの癖に難しいこと知ってるんだなw」
「ハァ??こんな奴が知らない者はいないと言われる有名人って噂のやつか??まぢ嘘っぱちじゃねーかよ！！」
「オマエ・・・。偉いよな。人々のために死んでくれるなんて。」
「あぁ。何かもう、クソ頭にきた。コイツ、絶対許さねー！！！」
不良生徒はもう、カンカンだ。
「ど??どーすんだよ相葉！！何とかすれよ！！」
「そんなこと言われても無理だよ！！あの人３年でかなりケンカ強いって有名だし・・・。」
バシッ！！
不良生徒は、櫻田の顔面を思いっきり平手打ちで叩いた。
櫻田は、無言でその場に倒れ転んだ。
「・・・・。やべぇ・・・。」
不良生徒もさすがに焦ったようだ。
「じゃあな！！」

不良生徒は逃げて行った。
「・・・櫻田くん！！櫻田くん！！大丈夫??」
相葉はとても心配していた。
「・・・??相葉??」
「櫻田くん！！！」
「俺・・・さっきまで・・・何やってたんだ??」
「えっとね。話せば長くなるんだけど・・・。」
相葉は、櫻田にさっきまでのことを全て話した。
「そ・・・そんなことがあったのか！！」
「うん。まさか櫻田くんがあんなになるとは・・・。」
「俺達のせいです！！すみません！！」
2人は、頭を下げた。
「俺たちが変な作戦考えたから・・・。」
「??何の作戦だ??」
「ううん。何でもないよww」
「そうか・・・。でも・・・。」
「俺の方こそ、ごめんな。」
「??」
「ほら。高所恐怖症のこと隠してたから・・・。俺、カッコ悪いから言いたくなくて・・・。」
(え・・・僕だけに言わなかったってことだよね??)
「でも、これでもう言えた。よかったよ^^」
「櫻田くん・・・。やっぱ櫻田くんは鈍感のままの方がいいや！！」
「は??何のことだ??」
「櫻田くん。僕櫻田くんのことコレカラモ好きでいていーい??」
「あぁ。まぁ、もちろん。」

2人はヒソヒソと話した。
「んまぁ、これはこれで作戦成功・・・だったりw」

「おぅ・・・ｗｗ」

「櫻田くん。明日休みだけどどーする??」
「そうだなぁ。どっか2人で出かけるか。」
「うん。じゃ、遊園地なんてどう??」
「遊園地・・・乗り物・・・ジェットコースター・・・観覧車・・・高い・・・。」
「??どうしたの??」
「嫌だァァァ!!!」
（高所恐怖症発生ｗｗｗ）
3人は、腹を抱えて笑った。

失敗

第五章☆ミ「失敗」

暑い夏も終わり、体育祭の次の大きな行事、音楽発表会がやってきた。
音楽発表会は、３年生にとっては最後の行事でもある。
学校の中だけで行うから小規模なのだが、地域の人はみんな見に来る。
そして何より、他校の女子生徒も見に来るので、男子生徒はみな気合いを入れる。

「はい。んじゃ、早速演奏の担当決めるで～。」
生徒だけで計画し、演奏する。
先生は一切手助けしない。
「俺、今年も楽なのがいい～！！」
「俺は絶対大太鼓とか目立つのがいい！！女子も来るんだしさ。アピルのにもってこいだろ？」
「俺は地味なのがいいなー。間違えて目だったらめっちゃハズいし・・・。」
みんな意見がバラバラだ。
「はい。はい。んじゃ、自分のやりたい楽器にプレート貼って。」
やっぱり、一番人気なのは小太鼓とリコーダーだ。
地味だし、楽でちょうどいい楽器だ。
大太鼓、トロンボーンなんかも目立ちたがりの集まりで、結構人気がある。

そんな中、一番簡単で馬鹿にされやすい楽器タンバリンの希望者が2名。
相葉と、熱血男朝山だ。
「え??何でまた朝山がタンバリン??」
「去年、目立ちたいばかりにトロンボーン希望したら、まぢ練習とかきつかったからさー。今年は一番楽なのがいいと思って。」
「確かに去年は可愛そうだったなーw」
「そーだよ!今、トロンボーンとか大太鼓希望してるやつ、後で絶対弱音吐くぜ??」
「でもさー、タンバリンは相葉が一番お似合いだって。」
「だよな。去年もやったんだからさすがに慣れてるだろ??」
「てか、相葉にはタンバリン以外できるやつないしなw」
「ははは。確かにーww」

教室中に、馬鹿にしてはわざ笑う声が響く。
相葉は、馬鹿にされても事実なんだから仕方ないと認めているようだったが・・・。

「お願いだよ〜〜!!俺にタンバリン譲ってくれよ〜。俺去年、めっちゃ頑張ったじゃねーかよ!!」
「でもオマエのあれは自業自得じゃねーかよw」
「そこを何とかさ〜。」
朝山は必死になって頼んでいる。
相葉も譲りたくないようで困っている。

「ここは一つ、ジャンケンで決めれば??」
音楽実行委員が話を切り出す。

「おぉ。いいじゃねーか！！」
こういう決めごとの時に、ジャンケンで負けたことがないらしい朝山は大賛成している。
「な、いい考えだろ？？」
「えぇ・・・僕はちょっと・・・。」
ジャンケンに全くといって運のない相葉は大反対。
「じゃあ、他に何があるっていうんだよ？くじ引き？？それとも腕相撲？？アミダくじ？？」
「ん～・・・。」
相葉は止まってしまった。
ジャンケンじゃなかったとしても、腕相撲も弱いしくじ引きもアミダくじも運がない。
体育祭のときだってそうだ、くじ引き運のなさの結果、相葉が団長になってしまった。
これじゃあ、完全に相葉がタンバリンを辞めなければいけない。

「最初はグ～！！」
朝山が熱い勢いでグーの手を相葉の前に突き出してきた。
相葉も慌ててグーを出す。
「ジャンケン・・・」
・・・・相葉はパー。
朝山はチョキ・・・。
・・・相葉の負けだ・・・。
「よっしゃぁぁぁぁ！！！さすが俺様だぁぁぁぁ！！！」
朝山は両手を挙げてバンザイしている。
それとは真逆に、相葉は抜け殻のようになって落ち込んでいる。

「ってことで、相葉は残ったフルートになったからよろしく。」

実行委員なのに、人事のような台詞だ。

「あ、櫻田さんどーするよ？」
「あぁ。今日休みだっけ？？櫻田さんはやっぱ指揮者でしょ。」
「だな。じゃーこれで全員決定かー。」

（櫻田くんにこのこと言ったら何て返してくれるだろう・・・。）
相葉は、その夜、櫻田に電話した。
「あ、もしもし・・・ん？相葉？？」
「うん。もう、熱大丈夫？？」
「あぁ。大丈夫。明日は学校ちゃんと行けるから。」
「そっかぁ・・・。あ、今日音楽発表会の楽器担当について決めたんだよ！！」
「あぁ。もうそんな時期だったなw」
「櫻田くんはね。指揮者だって！！」
「あはは。去年と同じじゃん。」
「僕はね・・・。」
櫻田はタンバリンを予想しているに違いないと相葉は思う。
しかし答えは違う・・・。
「フルート・・・。」
「え？？それ本当？？」
「うん。ジャンケンで決まったw」
声のトーンを少し上げて笑ってみせるも、なりきれてない。
全然笑えなかった。
「誰とジャンケンしたんだ？？」
「朝山くんだよ。ほら、去年トロンボーンで大変そうだったでしょ？だから今年は一番楽なのがいいんだって。」
「何だそれ。自業自得だな。」

（・・・誰かさんと同じこと言ってるｗ）
「壮也～夕飯できたわよ～。」
電話越しの向こうから、櫻田の母の声がした。
「あ、そろっと夕飯食べないと。また明日な。」
「うん・・・。」
ガチャンッ。
電話が切れると、何だか虚しくなる。
明日が・・・何か嫌だ。

翌日・・・。
「早速、練習始めまーす！！」
音楽実行委員は楽譜をクラスのみんなに配った。
相葉：（えーー！！楽譜読めないよー）
「じゃー、早速担当する楽器持ってきて各自練習開始！！」
全員：「はーい。」
相葉は早速、フルートを用意した。
「櫻田くん、これってどうすれば・・・」
・・・櫻田は指揮者なだけあって、大変忙しそうだ。
（・・・やっぱり聞くの辞めておこう・・・。）
突然、朝山が相葉の肩を叩いた。
「？？」
「がんばれよーｗｗ応援してるぜｗｗｗ」
朝山は、わざ笑うかのようにして鼻を高くしてみせた。
（ムカつく～～～！！！）
でも、何も言い返せなかった。
（朝山だって僕のこれから経験するであろう苦労を知っているはずなのに、何でそんなこと言うんだろう・・。）

・・・練習が終わり。
「練習終わりー！お疲れ様でしたー！あ、放課後もあるから忘れんなよー。」
（えーーー！！放課後もあるの！？最悪・・・。仕方ない。早退しよう。）

・・・放課後。
「じゃー、早速みんなで合わせるぞ～！！・・・あれ？？相葉は？？」
実行委員の言葉で、みんなも相葉がいないことに気づく。
「櫻田さん、何か知ってますか？？」
「いや・・・分んない。」
ある一人が言った。
「どーせサボリじゃねーの？？」
それに続けて、また誰かが言った。
「だよな。アイツ、さっきの練習のときも青い顔してたぜw」
実行委員は気難しい顔で、「はー、フルートなんて最も重要なパートなのになぁ。」と呟いた。
それから少し、重たい空気の中での練習が始まった。

翌日の朝、相葉が席に着くと、すぐ目の前に櫻田の姿があった。
「あ、櫻田くん、おはよー。」
櫻田は挨拶を返してこない。
（？？）
「相葉・・・。」
櫻田はいつになく真剣な表情だった。
「何？？」
「何で昨日早退したんだ？？」

「え・・・あぁ、何か頭痛がひどくて。」
「・・・それ、本当か??」
「え?本当だよ??」
櫻田が人を疑うことなんてめったになかったので、相葉は少し驚いた。
「・・・嘘だろ。」
「え・・・??何で・・・??」
櫻田は相葉の目を見つめた。
相葉は堪え切れなくなって目を反らした。
「やっぱり・・・嘘だな。」
「・・・ごめん・・・。」
その真剣な眼差しに、相葉は嘘をつくことなどできなかった。
「嫌なことから逃げたらそれでおしまいだろ??何も成長なんてできない。」
「うん・・・。ごめん・・・。」
「分ってくれたならいいんだ。今日の練習はちゃんと出るんだぞ。」
「・・・うん。」

・・・そして放課後。
「早速パート合わせするぞー。」
相葉：（うっそぉ!?何にも分んないよ。そんなの。）
そして、すぐにパート合わせが開始した。
「おい相葉ー。何だよ。全然音聞こえてこねーぞ??吹いてるフリか??」
「・・・だって昨日早退したから何にも分んないんだもん。」
「それはオマエが悪いんだろ。」
「そーだよ。みんなオマエを越して、1歩先に進んでんだ。オマエも追いつけるように努力くらいすれよ。」
相葉は、櫻田の方を向いて、「そんなこと言わなくてもいいのにね。

」と目で合図を送った。
櫻田は相葉に呆れたような顔をしていた。
（・・・櫻田くんに見離された・・・。）
相葉は呆然と立ち止まった。
何を考えたらいいのかも忘れ、自分が自分でなくなったような気がした。

家に帰ると、相葉は夕食も食べずに自分の部屋に入り、ベットの上に横たわった。
そして、誰にもばれないようにして思いっきり泣いた。
相葉は前向きに何てなれなかった。
全部、悪いのは自分自身の弱さだって分ってるのに・・・。
努力するってどういうことなの??
努力して必ずみんなに追いつけるものなの??
相葉は、前にどう進んだらいいのか、誰を頼ればいいのか、何もかもが分らなくて焦って、心に詰まった何かが邪魔して、自分の都合のいい方に行きたがるのだ。
こんな経験、誰にでもあることだろう。
でも、その『弱い心に打克つことによって人は成長する。』これを櫻田は相葉に伝えたかったのだ。
結局、相葉は次の日の放課後、練習に参加するのが嫌で、すぐに早退した。

また次の日も、その次の日も、相葉は弱い心に打克つことができず早退を繰り返した。
ついには、学校にすら顔を出さなくなってしまった。
相葉の母は大変心配していたようだったが、毎日、部屋の前に食事を持っていくものの、声をかけようとはせず、気が病むまでそっと

しておくことにした。

数日後、櫻田から電話がかかって来た。
「・・・相葉、現実から逃げてんなよ。」
櫻田は、その一言から話を切り開いた。
「・・・もう、いいんだ。もう一人の自分が邪魔してきて勝てないんだ・・・。」
「負けるなよ。自信持てよ。」
「無理だよ・・・。ここ数日考えたけど、やっぱり僕は僕のままなんだって。」
「相葉ならできるって。」
「できないよ。僕だからできないんだよ。」
「・・・オマエ、そんな奴だったっけ??俺の知ってる相葉と全然違う。」
櫻田の声は、怒ってるわけでも、喜んでいるわけでもない、絶望の底に沈んだ声だった。

「・・・櫻田くんはいいよね。恵まれた人間に生まれたんだから。」
相葉はつい、この一言を口に出してしまった。
「相葉・・・、自分が恵まれてない人間とでも思ってるのか??」
「そうだよ。櫻田くんは努力なんてしなくても何でもできるし、いつもみんなの中心だし・・・。僕には、生まれながら、できることに限りがある。だからいつもみんなの笑い物なんだ。」
櫻田は、小さく、か細い声で呟いた。
「・・・俺だって・・・。俺だって・・・。努力・・・してきたのに・・・。」
ガチャンッ。
電話が切れる。

虚しさに包まれた、透明な空気が広がる。
相葉は、その櫻田の言った言葉の意味が分らなかった。
でも、その言葉が気になって仕方なかった。
・・・相葉はその日から不眠症に侵された。

こんなにも、夜が辛いことなんてなかっただろう。
考えても、考えても、先が遠く感じる言葉。
『・・・俺だって・・・。俺だって・・・。努力・・・してきたのに・・・。』
（・・・何で??何で櫻田くんが努力する必要があるの??櫻田くんほど、完璧で都合のいい人間はいないよ。）

コンコン。
部屋のドアを叩く音がして、相葉はふと、我に返った。
「今日は少し、中に入れてもらっていいかしら??」
それは、母の声だった。
「うん・・・。」
今日は何だか不思議な気持ちになって、素直にドアの鍵を開けた。
母が昼食の乗ったお盆を持って、ゆっくりと部屋の中に入ってきた。
久しぶりに見る母の姿。
何だか少し痩せたようにも見える。
自分のことを心配してくれている表れなのか??相葉は少し、申し訳ない気持ちになった。
「今日はね。幸也の好きなオムライス作ったのよ。」
「うん・・・。ありがとう・・・。」
何か、照れくさいながらも、素直にありがとうって言えた。
それだけで、何かとてつもない嬉しさが込み上げた。
母も、その『ありがとう』の言葉に、隠しきれずにふふっと笑顔を

洩らした。
「幸也、言いたくないなら無理に言う必要はないのよ。お母さん、毎日こうして、幸也にご飯作ってあげるから。」
「・・・・・。」
何も言えなかった。言葉が見つからず、下に目線を向けた。
「壮也くんって、本当に思いやりのある子なのね。」
「・・・今、櫻田くんの話は聞きたくないんだ。」
「・・・壮也くんと何かあったの??」
「・・・別に。」
思い出しただけで、変な気持になる。
腹が立つような、悲しいような・・・・本当にいろんな気持が複雑に入り混じっている。
「壮也くんねぇ、幸也が学校行かなくなってから、毎朝、家に顔出しに来てくれるのよー。」
「・・・櫻田くんは、僕が嫌いになったんだよ??」
「あら。そんなわけないじゃない。毎朝、玄関のチャイム鳴らして、相葉は学校行けそうですか??って聞いてくるのよ。相当幸也のこと心配してるのねw」
「・・・そうだったんだ・・・。」
「それにね、私が痩せたことに気付いたのか、2人分の旅行券くれて、ゆっくり疲れでも取って下さいってwまぁーお父さんよりナイスなボーイねw」
「・・・お母さん、それは確かだけど言っちゃだめだよ。その言葉は（ーー；）」
「ふふっwそうね。」
父が亡くなってから、もはや5年が経つけれど、母はずいぶんと一人で頑張ってきた。
その姿は相葉も見てきたから知っているし、櫻田もそれを気にして、お母さんにはやたらと優しい。
「壮也くんは助けてくれるからお母さん、一人じゃないし、幸也が

今日みたいにありがとうって言ってくれるのを想像すると、明日も頑張ろうって思える。お母さんは幸せ者だわ。」
「・・・お母さん、いつもありがとう・・・・。」
「ふふっ。何か嬉しくてたまらないわ～w」
母の涙を見たのは、ずいぶんと久しぶりのことだった。
たぶん、父の葬式の時以来だろう。
いや、もしかしたら、自分の知らない所で、密かに泣いていたのかもしれない。
（・・・！！）
相葉は、ふと、櫻田の言った、あの言葉の意味を思い出しては気づいた。
『・・・俺だって・・・。俺だって・・・。努力・・・してきたのに・・・。』
そうか！！櫻田くんも、陰で努力してきた人なんだ。
毎日僕が学校に来れるか聞きに来るのも、お母さんの異変に気づいて心配するのも、僕を毎回助けてくれるのも、全部全部、どこかで努力してきた櫻田くんがいるからなんだ！！
僕は・・・僕は、何にも櫻田くんのこと分ってあげられなかった。
ごめんね。僕、一生懸命努力するから！！
弱い心に、打克ってみせるから！！
「お母さん、僕、音楽発表会で、フルート担当することになったんだ。」
「あら、すごいじゃない。懐かしいわねぇ。」
「？？お母さん、フルート吹いたことあるの？？」
「あるわよ。だってお母さん、昔吹奏楽部で、フルート担当してたもの。」
「そうなの！？」
「そうよ。あら、言ってなかったかしら？？」
「うん！！初めて聞いたよ！！」
「ふふっ。そんなに驚くことなの？？」

「今、フルート持ってる??」
「あー。もう、何年も前のことだからねー。捨てちゃったかもしれないわ。必要なの??」
「うん!!練習したいんだ。すごく。」
「そうねぇー・・・・。」
母は、少しためらっては考える。
「よし。決めた!!いいわ。買ってあげる!!」
「えぇ!?本当??」
「今回はお母さん、奮発しちゃうんだから。」
「でも・・・すごい高いよね。」
「大丈夫よ。中古で安いのたくさん売ってると思うし。」
「そっかぁ・・・。ありがとう。」
「これでありがとうは3回目ね。今日はすごく嬉しいわ。」
僕も・・・僕もすごく嬉しい!!
何か、絶望からの逃げ道を知れたっていうか・・・。
何だか、今日は眠れそうな気がする。

数日後、母は約束通りフルートを中古で買ってきた。
思ったより、中古にしては使いやすかった。
「ありがとう!!これ何かすごい新品だし!!」
「もちろん。それは店で一番高いのを選んだからね。」
母は少し鼻を高くして見せた。
「そうなの!?ありがとう!!大切にするよ!!」

それからというもの、相葉は母に教わりながら、家でのフルート猛特訓を始めた。
最初、あきらめかけていた頃の、あれは何だったのか。と思えるほど、日々上手になっていった。

そして、音楽発表会１週間前の今日、相葉は３０日ぶりに登校した。
教室に入った途端、教室の空気が変わった。
さっきまで、いつもと変わらず話声が聞こえていたのに、途端に静かになり、みんな相葉を見つめた。
櫻田は、何とかしようと一人、声を発した。
「おっ相葉。おはよう。」
「おっ・・・おはよう・・・。」
相葉は櫻田が気を使っているように思えて逆にその場にいずらくなった。
「とりあえず、席着けよ。」
「席、忘れてるんじゃね？」
一人がそう、言った。
「だよな。３０日間もずる休みしてたんだもんな。」
２、３人と次々に声を発していく。
「だって逃げたんだよな。フルートが嫌でw」
「つか、今日来たってどうしょもないだろ。音楽発表会１週間前だぜ？？」
「そーだよ。何？？俺らの音楽発表会ぶっ潰す気？？」
「来るんだったら、音楽発表会後にしてくれよー。」
さっきまでの静かさが一気に愚痴零れに走る。
「おい、そんな言い方しなくても・・・。」
櫻田は何とかなだめようとするものの・・・。
「櫻田さんも疲れたでしょう。あんな馬鹿で何もできない奴と一緒にいて。」
「そうそう。相葉がいない間は楽だったでしょう？？」
「いや・・・。そんなこと・・・。」
「みんな・・・！！」
相葉が声を発すると、みんながまたもや静かになった。

相葉は、緊張しながらも、はっきりと想いを伝えた。
「僕・・・、練習したよ？一生懸命練習した・・・。」
「でも、フルート学校にあったしどうやって？？」
「お母さんがわざわざ中古屋で買ってきてくれたんだ。それから毎日欠かさず練習した。まだ不慣れなとこはあるけど、みんなの前で演奏できる自信はある。」
「うー・・・ん。まぁいいや。とりあえず演奏してみて。」
みんなはまだ信じられないようだ。
クラスの一人が、相葉に乱暴な仕草でフルートを手渡す。
相葉は、準備を終えると、深呼吸をして真剣な表情に切り替えた。
フルートから聴こえてきたメロディに、みな、息をのんだ・・・。
それは、確かに相葉の元から聴こえてくるのだが、相葉が演奏しているとは思えなかった。
少しだけ、ほんの少しだけぎこちない感じもするが・・・。
みんなは驚きの表情を隠せずにいた。
「だから言ったじゃん。」
櫻田が背後から声をかけた。
「？？」
「相葉ならできるって・・・。」
相葉は、その言葉に、声で答えず笑顔で答えて見せた。
その日から一週間、絶えず練習は続いた・・・。

・・・そして一週間後・・・。
「うわぁ～～どんだけ人いんだよ！！」
「可愛い子いないかなぁ～～？？あ、あの子可愛いかも！！」
「馬鹿！！」
「＾＾；」
今年の音楽発表会は何故かやたらと人が多い。
人から人へ、誘いに誘われて、他校の生徒までもがたくさん訪れた

のだ。
相葉は、自分のクラスの演奏が始まる１０分前になると、以上でないほどの緊張感に襲われた。
櫻田は、そんな相葉の様子に気づいて心配していたものの、なかなか相葉の緊張感は収まりそうになかった。
そんな中、とうとう自分の演奏の番がやってきてしまった。
「続いては、２年Ｃ組の演奏です。今までの練習の成果を、どうぞご覧下さい。」
パチパチパチ・・・・
たくさんの拍手が聞こえる・・・。
拍手の音を聞いただけでも、来ている人の多さが分るくらいだ。
相葉はたくさんの人を見ると緊張してしまうため、下を向いていたが、音がなかなか響かなくなるため、やっぱり前を向くことにした。
でも、人々の姿は目に映っていながらも、頭では違うことを考えていた。
そう、始まるほんの５分前、櫻田の言った一言だ。
「頑張れよ。ご褒美あげるから＾＾」
（ご褒美って何・・・？？もしかして抱っことか！？・・・んなわけないかぁ・・・。どうせお菓子とか言ってまた子供扱いされるよ・・・ｗいや、もしかしたら・・・ということもありえる・・・よね？？ｗいや、ないない・・・。でもあったり・・・やっぱり、なかったり・・・。）
そんなことを考えているうちに、演奏の方に頭が回らなくなってしまった。
我に帰り、再び前を見つめると、たくさんの観客の姿が・・・！！
気がつくと、自然と貧乏ゆすりをしていた。
相葉は緊張感に抑えきれなくなり、間違った音を出してしまった。
観客がそれに気づいたのか、やたらとこっちを見てくる。
下手な作り笑いでごまかした。
今、どこかに穴があったなら、今すぐ逃げ込みたい思いで一杯だっ

た。
とにかく、この後は最後まで間違えないようにしようと、それなりに頑張ったものだ。
次のミスは、何とか抑えることができた。
でも、最後の最後で、音を外してしまった。
観客全てが一瞬、相葉の方をチラリと見ては視線を違う方へ移す。
嫌な冷や汗が出てきた。
手の震えが止まらなくなった。
足も微かに震えている気がする。
この場をどうしのごうか考えているうちにいつの間にか演奏は終了していた。
拍手が聞こえ、またいつの間にか教室にいた。
何か考えているうちに、音楽発表会はとっくに終了していたようだ。

明日が来るのが怖い・・・。
こんなにも、太陽が沈むのを、時計の針を、気にしたことなどなかっただろう。
今、思い出すだけでも身震いがする。
帰り道、みんなが自分を、まるで人間じゃないかのようにあきれ返って見ていたのを・・・。

いくら「明日が来るな」と願っても、明日が来ることを願っている人がいる限り、正常に地球が回る限り、明日は必ずしも訪れるものだろう。
結局、気づいたらとっくに朝日が顔を出していたのだった。
枕元は、汗でびっしょり濡れていて、どれだけ夢の中でも嫌なことを考えていたのかが想像できる。

明日が来てしまったことに疲れて、朝食も一切口にすることのないまま、ただボーっと時計の針を見つめていた。
しばらくして、ピンポーンというチャイムの音と共に我に還った。
「相葉ー！学校行くぞー！！」
それは、いつもと変わらぬ清々しい櫻田の声だった。
母が出てきて慌てた様子で答える。
「あの子朝食も食ってないわw上から全然降りてこないの。まだ寝てるのかしら。」
「もー。困った奴だなー・・・。」
一人言のように呟きながら、櫻田が二階へ上がる。
部屋のドアは、鍵が閉まっているわけでもなくすんなりと入ることができ、入ってすぐ目の前にしゃがんではボーっとしている相葉の姿があった。
「おい。相葉。気にしてんのか？昨日のこと。」
「・・・。」
返事をすることができず、変わりに首で答える。
「あんなんどーってことねーよ。誰も気にしてねーって。」
「でも昨日の帰り道・・・。」
「あれは昨日のことだろ！今日になればもう、みんな忘れてるって。」
「大丈夫。みんな案外単純だからw」
そう言って、櫻田は相葉の手を引きずりながら学校へと向かった。

徒歩で２０分後、ようやく学校に着いた相葉と櫻田。
相葉が俯いて不安な様子にもかかわらず、櫻田は勢いよく目の前の扉を開けた。
その途端、ガヤガヤ騒いでいたはずの男子達がピタリと声を止めた。
「みんな！おはよう！！」

櫻田が一人挨拶をする。
「あ、おはよーございます！！」
「おはよっす！」
「おはようさーんw」
遅れ遅れでみんなが返す。
櫻田が相葉の耳元で囁く。
「な？何ともないだろ？？」
「じゃあ、さっきのは何・・・？？」
「きっと先生と間違えたんだ。気にするな。」
「うん・・・。」

「おはよう・・・。」
相葉が萎れた声で挨拶する。
みんなはまるで聴こえなかったかのように無視した。
仕方なく、イスに座ろうとすると・・・。
「！？」
誰かにイスを引かれ、その場で転んでしまった。
「・・・・。」
「オマエがイスに座る権利なんてない！！」
「いや、学校に来る権利自体ないだろ！！」
「アハハw確かにw」
「つか謝罪しろよ！！」
「土下座してちゃんと謝ってもらわなきゃ気が済まねーんだよ！！」
「どーげざ！どーげざ！」
クラスのみんなが手を叩いて土下座コールを始めた。
相葉は言われるがままにその場に土下座した。
「謝罪！謝罪！」
今度は謝罪コールを始める。
「すみませんでした・・・。」

相葉が微かに震えた声で口を開く。
「あぁん??聞こえねーんだよ!!もっと大きい声出せやコラ!!」
「舐めてんのか??」
「自分は何にも悪くないみたいな顔しやがって!!」
「音楽発表会でみんなに恥ずかしい思いさせたんだから当然のことだろ!!」
「山田君も何かいーなよ。さっきから見てるばっかでつまんないでしょ?」
クラスの中で唯一一人のがり勉山田は少々ためらったものの、冷静な口調で話し始めた。
「確かに、相葉君みたいなヘタレ人は、将来ロクな仕事にもつけないし社会の何の役にも立たない。ハッキリ言ってゴミと同じ処分だと思います。」
「さっすが山田君!!いいこと言うねぇー!!」
「山田先輩!!見なおしましたよ!!」
「んじゃ、早速・・・ゴミは処分致しますか♪」
そう言って、クラスの一人がポケットからライターを取り出した。
そしてライターに火をつけ相葉に近づける・・・。
「何やってんだよ!!!」
今までずっと様子を見ていたらしい櫻田が大声をあげた。
すぐに相葉を火の近くから離し、ライターを取り返した。
「お前たち、この高校生活3年間で、何にも学んでなかったんだな。これじゃあ何を得るために今、こうしてここに立ってんのか分んないよな・・・。」
「はーうっせーんだよ!!もうオマエこそ櫻田さんでも何でもねーよ!!綺麗言ばっか並べやがって!!」
「俺の事はいくらでも言っていいけど、相葉のことを悪く言うのは許さない。相葉は何も悪くない。」
「十分悪いだろ!!オマエも笑ってやれよ。俺らの最後にして最大の行事をぶち壊したんだぜ??」

「頑張って失敗したことに文句を言う権利はない。地域の人もみんな分ってるはずだ。相葉が間違えたことの裏には努力があることを。」
「・・・・。」
一気にみんなが口を閉ざす。
「さ・・・櫻田くん!!もういいよ・・・。」
「あぁ・・・そうだな。こいつらには何を言っても無駄だということが分った。これから卒業まであと数カ月、2人で何とかやってこーな。」
そう言うと、櫻田は立ち上がり、教室から出て行こうとした。
「櫻田くん待って!!何処行くの??」
「こんなやつらと共に過ごしても時間の無駄だ。今すぐこの教室から出てこうぜ。」
「ホントは・・・・。」
一人が口を開いた。
「ホントは、相葉のことも、櫻田さんのことも嫌いだなんて思ってない。」
「え・・・??」
思わず櫻田が足を止める。
「ただ・・・相葉が自分より下の地位に立ってることで安心してたんだ。」
みんなが次々と「俺も・・・ゴメンな。」と声を挙げる。
「みんな同じだろ?上とか下とかそんなのないだろ??」
櫻田が宥めるように言った。
「そうですよね。今思えば何かバカバカしいですね。」
「あとそれ・・・!いらないから。」
「??」
「俺だけ敬語にしなくていい。上とか下とかないって言っただろ??」
「はい!!あ・・・うん・・・w」

みんなの笑い声が教室中に響きわたる。
外は寒い秋空の中、ストーブすらないのに温かさに包まれた、クラスの笑顔がそこにあった。

永遠に君想い☆ミ

鮮やかな桃色の桜が空を舞う今日この日、僕はめでたく卒業する。
そう、高校生という生き方に終止符が打たれるのだ。
この制服を着るのも今日で最後。
この校舎の中に足を運ぶのも今日で最後。
この校歌を歌うのも今日で最後。
そして・・・好きな人に会うのも今日で最後・・・。

第6章☆ミ「永遠に君想い☆ミ」

涙ながらも校歌で全校生徒に見送られながら体育館を退場した。
その後、すぐに先生の声がかかり、急きょ教室へと移動した。
「最後の集合写真を撮ります!!みんな最高の笑顔でな＾＾」
みんな穏やかな調和で雑談しながら並んで行く。
「ホント、３－Ｃは平和だったよね～（＾＾）」
相葉がいつもより少し控えめな声のトーンで呟く。
「いやぁ・・・大変だったよ３－Ｃは。事件ばっかしでさ～もちろんオマエのせいでな＾＾；」
「ははははは」
みんなの笑い声と共にふっと笑顔も零れる。
今だ!待ってました!と言わんばかりにカメラマンがシャッターを切る。
「ん??え?ちょっカメラマン!!今のはないっしょ?」
「いやぁみんないい笑顔してたもんで＾＾；」
「相葉のお陰だな。」
クラスメイトの一人が呟く。

「センキューw（ある意味）」
相葉も自然と笑顔になる。
最後にして最高の1枚を刻んだのであった。

写真撮影が終わり、その後卒業祝いとしてクラスみんなで地元のラーメン屋さんへ向かった。
「俺醤油！！」
「いや、ここは味噌だろ！！」
「さっぱりした塩が一番だって！！」
先生が親指を立ててウインクした。
「みんな意見が合わないようだからここは先生の好きなとんこつラーメンに決まり☆」
「そんな～～～！！！」

「俺、ちょっとお手洗いに行ってくる。」
そう言って櫻田が席を立った。
櫻田の姿が見えなくなったのを確認すると、相葉の元に数人の男子が歩み寄って来た。
「で、どうするよ？」
「え？？何が？？」
相葉はアホらしく首を傾げた。
「だーかーらー！！櫻田さんのこと！！」
「櫻田くんがどうしたって言うの？？」
「どうしたもこうしたも・・・今日で最後じゃん？」
「え・・・？？」
「櫻田さんと会えるの・・・。」
え・・・？？どういうこと・・・？？
最後って・・・最後って・・・。

そんな言葉僕らにあるのかな??
用意すらされてないよね?
だって僕と櫻田くんは同じ大学に行くんだから・・・。

その時、櫻田がお手洗いから帰って来た。
気づくと、みんな何もなかったような顔で元の位置に戻っていた。
櫻田も何の話をしていたかなんて全く気に留める様子もなく座布団に腰をかける。
また雰囲気が戻ってあっちこっちでたわいもない話をする。
いつの間にか時計の針は１４時を指していて机の上の器の中身も全部空だった。
「さてと。」
先生はゆっくり立ちあがるとコートを羽織り、ポケットから財布を取り出した。
「あー食った。食った。もう腹一杯。」
「もう歩けなぁ～い先生送ってー!!」
先生は財布の中から札を取り出しながら「食った後のカロリー消費だと思って歩け。」と笑って言った。
みんなは「ちぇ～相変わらず優しくないね～。」と口々に言いながら玄関の方へ向かった。
流されるようにして次々に生徒たちが店内から出て行く。
店の店員の「ありがとうございました」の声と共に全員が店を後にした。
店から出ると、各自歩いて帰る、自転車で帰る、お迎えの車・・・様々だ。

ポンと軽く肩を叩かれ振り返る。
しかし後ろには誰もいない。

横を見ると、1人のあるクラスメイトの姿があった。
「がんばれよ。おまえ次第だから。」
そう、彼は相葉の耳元で囁くと自転車にまたがり一定のスピードで走って行った。

櫻田がいつもと変わらぬ微笑みで言った。
「一緒に帰るか。どうせ家近くだし？」
「うん・・・。」
いつものどこにでも存在するような何一つ変わらない帰り道。
この道を何回この2人で行き来したことだろう。
数え切れない程たくさんの空の形を見ながら2人で歩いた帰り道。
今日で最後・・・。
今日で最後・・・??
そんなはずないよね??
だって僕らは同じ大学に進むんだって約束したもんね。
ずっとずっと、この先も一緒だよね・・・。
一緒だよね・・・??

とうとう、無言のまま先に櫻田の家の前に着いてしまった。
決して長い時間だったとは思わなかった。
いろんなことを考え過ぎて何をしていたのか、自分が何故、今ここに立っているのか分らなくなるくらいだ。
今までの高校3年間を、先ほど歩いた道筋に例えてみれば、人生なんてあっけもなく早いものに感じられる。

「じゃあ・・・な?」
櫻田のいつもと違うよそよそしい挨拶。

その挨拶と共に寂しい風を感じる相葉。
櫻田は相葉の顔を伺うと、「この先は何も言わない方がよい」と言った感じでドアに手をかけた。

「・・・待って！！」
静かな時の中に相葉の少し力の入った声が響く。
櫻田がピタリと足を止め、ドアから手を離す。
「来て。」
相葉はそう言うともと来た道を戻って歩き出した。
櫻田は何も言わずにただひたすらついて行った。

先ほどと同様、無言の空間が続く。
しかしその沈黙も、ある公園の前で解き放たれた。
「ここ・・・覚えてる??」
「え??」
「櫻田くんが小さい頃によく行ってた場所。」
「え・・・何で知ってんの・・・??」
「僕、幼いころから知ってたよ。」
間をおいて相葉が言葉を続ける。
「櫻田壮也のことを。ずっと見てた。」
「え・・・??幼いころって、俺がこの公園によく行ったのは小学生の話だぞ?」
「うん。小学生の頃、この公園で必死に逆上がりの練習してたよね。」
「見られてたのか・・・。恥ずかしいな。」
「櫻田くんは昔からあこがれだった。何でも一生懸命で・・・。」
相葉は頭を下げて謝った。
「本当にごめん。櫻田くんはできる人だからいいよねとか何も知ら

ないように言って。」
「はは。そんなのもう気にしてないし^^」
「本当は知ってた。この公園で字の練習もしてた。なわとびの練習も計算の練習も、全部全部、たった一人で・・・。」
「相葉・・・俺こそごめんな。俺はお前が俺のことずっと見ててくれたなんて気付かなかった。」
「いいんだ。僕は助けてもらったから。小さい頃櫻田くんに。」
「え・・・??」
「忘れてるかも知れないけど、昔この地域に小さな丘があったの覚えてるよね?そこで僕が迷子になって泣いてたら、櫻田くんが来てどうしたの?って・・・。そして家まで送ってくれた。」
「あぁ!!あれ相葉だったのかwちっこいし泣き虫だったし今の相葉だとは全く思いもしなかったなぁ^^;」
「僕は逆に年上に見えたよw」

「櫻田壮也さん」
相葉がいつになく真剣な眼差しで櫻田を見つめる。
「はい」
櫻田も同じように見つめ返す。
「僕はあなたが手を引いて家に連れて行ってくれたあの日から大好きでした。」
「え・・・!?」
さすがにこれは友情の中でのスキとは違うことに気づいたのだろうか。
櫻田が険しい表情で相葉を見つめる。
「櫻田くんがずっとずっと大好きだった。櫻田くんが隣にいることが幸せで楽しくて・・・隣にいないとすごく泣きたくなった。」
櫻田の手がそっと相葉に触れる。
そのまま自然と手が繋がる。

「俺も・・・」
小さな声で櫻田が呟いた。
「俺も同じ。相葉が隣にいると幸せだし楽しいし、何より・・・。」
櫻田は相葉の頭をぐしゃぐしゃ撫でた。
「可愛くて仕方なかった。弟みたいで人懐っこくて大好きだった。」
「櫻田くん・・・。」
相葉の顔に自然と笑顔が漏れる。
「でも・・・。」
その言葉と共に、相葉の澄切った心の中に、行き先の分らない濁った雲が現れた。
櫻田の握る手にぐっと力が入る。

櫻田はそう言うと、相葉に背を向けた。
「捲ってみて。」
嫌な予感を残しつつも、相葉はゆっくりそのシャツを捲り上げた。
そこには、知りたくもない真実が露わになっていた・・・。
「俺には、この傷を癒してくれる人がいるんだ・・・。」
大きなたくましい背中に、大きく深く刻み込まれた傷跡。
この傷を癒せる人だなんて、相当櫻田のことを想っている人に違いない。
「俺、片思いなんだ。」
「え!?」
「その人を見るたびにこの傷が癒されてくんだ。でも必ず伝えるよ。俺の長い間の想いを。」
櫻田くんが長い間片思いしてたと同じに、僕も長い間の片思いだったんだ・・・。
そりゃそうだよね。みんながみんな両想いになれるわけないよね。
神様はそんな平等に何かしてくれないよね。

「相葉、大学の話、俺から先生に言っておいた。」
「え・・・？？」
「本当は、幼稚園の先生になりたかったんだろ。」
「え・・・うん。」
「相葉、子供が大好きだもんな。」
「それはそうだけど・・・。」

櫻田は、繋いでいた手をそっと離すと、背伸びをしながら言った。
「俺は相葉と同じ大学に行くつもりはない。だって相葉には相葉の夢があって、何でも俺と一緒ってわけにはいかないから・・・。」
「そんな・・・。僕・・・櫻田くんがいなきゃ無理だよ・・・。」
櫻田は相葉のことを指差しながら言った。
「大丈夫！オマエなら、相葉なら絶対いけるって！」
「何でそんなことが言いきれるの？？」

櫻田は相葉の肩をポンと軽く叩いた。
「俺は・・・ずっと相葉を見てきたから。」

春の心地よい風と共に桜の花びらが舞う。
聴こえる・・・愛しい声が・・・。
感じる・・・温かい温もりを・・・。
櫻田は片目を器用につぶって見せた。
「絶対くじけるな。俺にはそれしか言えないけど、相葉は決してできない奴じゃないから。みんながきっと支えてくれるはずだから。俺の変わりのまた新たな誰かが表れるはずだから・・・。」
櫻田はそう言い残すと、相葉に背を向けて、一歩足を進ませた。

「・・・ねぇっ！！」
相葉の声に櫻田は足を止める。
「櫻田くんが片想いなら。」
櫻田は何も言わないまま後ろから聞こえる声に耳を澄ます。
「僕は・・・永遠に君想いでいいかな??」
熱が込み上げてくる。
何だろう。とてもくすぐったくて温かい。
それは今までに味わったことのない、とても不思議な感覚だった。

櫻田は微かに口を開いた。
「もちろん。いいよ。」
相葉はその背中を見つめながら照れ隠しに笑った。
その笑顔はどこか懐かしい夢を見ているようで、日曜日の太陽のようでもあった。
櫻田は手を上に挙げて振って見せた。
相葉も同じく手を振って見せた。
相葉は何度も手を振りながらその背中を見送り続けた。

やがて、櫻田の姿は見えなくなった。
掌に、桜の花びらがひらりと舞い落ちる。
相葉はそれをぎゅっと握りしめると、地面を思いっきり切って走り始めた。

「あれ・・・??ここでよかったんだっけ??で、確か会議室に集合だったよね。あれ??会議室ってどこだっけ・・・??あ!案内書忘れてきちゃったぁ・・・!!」
相葉はふと思い出す。
このパターン、高校の入学式の時と同じだ!!
で、体育館がどこか迷ってたんだっけな。
その時どうしたんだっけ・・・??
あ・・・櫻田くんが助けてくれたのか!!
相葉はぐるりと周りを見渡す。
みんな、もう親しい友達になったかのように何人か固まって歩いている。
端の方に目を移すと、一人だけで歩いている人がいた。
相葉は掌をぐっと握りしめて太陽を感じた。
そして、ゆっくりとその一人の少年に歩み寄った。
「ねぇ・・・会議室ってどこだか分る??」
「うん。知ってるよ。」
「じゃあ、一緒に行かない??」
「いいよ。よかったら友達になって。」
「うん!!よろしくね!!」

君と出会ってから月日は流れ　こんなそばで支え合って
君のくれたもの多くあって　僕の両手思い出増えて
楽しいことばかりではないが　君がいてくれたから乗り越えてこれた
本当君にありがとう　これからもあげたいよ何かを

いつだって　いつだって　気づかされることは多くて
つながって　つながって　いるから強くなれる
僕だって　君にとって　そういう人になれるかな？
君を想い・・・

いつも君が笑ってるから　その笑顔が胸にあるから
繰り返しの日々を乗り越えて行けるのは　そう　君がいるから

君といる時間がドンドン過ぎて　さっきやったこと過去になって
気が付くとそれが本当に惜しくて　一緒に居るのに笑ってなくて
共に過ごした時間が愛しくて泣き笑いも二人の宝もので
こんな僕でいいか　いつも聞いて　本当は解ってるのに

いつだって　いつだって　君を困らせてばかりで
ただ黙って　君笑って　僕を許してくれる
僕だって　君にとって　優しい場所になれるかな？
君を想い・・・

いつも君が笑ってるから　その笑顔が胸にあるから
繰り返しの日々を乗り越えて行けるのは　そう　君がいるから

二人で見たあの星空を　覚えてますか？

「時間を止めて」　君はつぶやき
世界中の時間よ！すべて止まれ　君が笑うまで

いつも君が笑ってるから　その笑顔が胸にあるから
この両手で持ちきれぬほどに強くなれるのは　君がいるから！

ＥＮＤ．

永遠に君想い☆ミ（後書き）

ＧＲｅｅｅＮの君想いとても勇気をもらえる曲です。
ぜひ聴いてみてください。

空白を空けることが好きなのか空白空けてばかりでした。
文章校正もまだまだといった感じですね。
これからがんばります！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8961l/

君想い☆ミ

2010年10月8日14時35分発行